

岡本章庵『千島見聞録』訳註

有馬卓也

【はじめに】

明治24年5月7日、横浜を出航した郵船に搭乗していた岡本章庵は、箱館と根室にそれぞれ数日逗留した後、千島列島へと旅立っていった。色丹・択捉・得撫^{ウルツプ}諸島を巡り、さらに根室・網走・札幌・石狩・小樽・箱館・青森と精力的に各地を視察している。そして詳細に現地の地勢を調査するとともに、各地の郡長・戸長・漁業主・漁夫・原住民たちから様々な情報を入力している。これらはその際の記録『千島日誌』（徳島県立図書館所蔵。岡本章庵関係資料目録・分類番号二三八―二四二。明治24・25年、写本）が記す所である。本日誌については徳島大学総合科学部紀要語文化第17巻に翻刻を掲載する予定である。さて、『千島見聞録』は、その記録に基づいて翌25年に上梓された千島24島の地勢報告書（以下本文と略記）である。全46頁

のうち本文は23頁であり、残る23頁には附録として

- ① 広告作 ② 告同人作 ③ 呈副島伯 ④ 将赴色丹、賦此広告
- ⑤ 将発京有此作 ⑥ 概言 ⑦ 偶吟五首 ⑧ 醉中走筆二十首
- ⑨ 書概言後 ⑩ 読新聞紙 ⑪ 偶吟二首 ⑫ 示書生五首
- ⑬ 観音台即事十首

が掲載され、最後に村山徳淳が跋文を寄せている。

本稿は『千島見聞録』の本文及び跋文の訳註である。

【凡例】

一、該本は明治25年刊。非売品。漢文（返り点あり）。一卷一冊。国立国会図書館蔵。

一、近代デジタルライブラリーにて閲覧可であるので、原文は省略し、書き下し文のみ提示した。

一、地名・動物名については原文に片仮名でルビがふられてい
ることがある。これらはそのまま表記した。また一度ルビが
ふられた地名・動物名は、後にルビがふられなくとも本訳註
ではルビをふった。

一、地名以外の難読漢字については平仮名でルビをふった。

一、適宜、注釈・語釈を施した。

一、原文中、明らかに誤植と判断できるものは改めた上で註記
した。

一、島名が現在とは異なる表記で為されているので、表題とな
っている各島名の下に（ ）で括って現在の表記を附した。

【千島見聞録】

国後島

根室の東北に在り。周回一百六十里。山川清秀にして、物類
殷繁す。東北に茶茶巖峻立し天に參す。樹木蔥鬱として、絶
嶺の積雪、皚然たり（註1）。迤なりて東に一港あり。跡射谷と
曰ふ。東北に巖巖（註2）、海中より斗出ず。宜しく小舟を泊す

べし。エトロフ
の右の岬は低くして長く、左の岬は稍高くして短し。峭壁（註
3）綿亘（註4）として、宜しく北風を防ぐべし。

〔註〕

（1）白いさま。

（2）高くそびえ立ち、草木の生えていない岩山のこと。

（3）切り立った険しい崖。

（4）長く連なっているさま。

稚子谷島（色丹島）

根室の東に在り。囲四十里。林岡綺錯（註1）し、芳叢曖暎（註
2）たり。景象、千島に冠たり。東北に鷗鵠潭灣あり。貨船聚
泊の所と為す。鷗鵠潭山は、東南に環す。列屏のごとし。土人
五十余口あり。明治十七年にト栖より遷り至る。言語・風俗、
悉く蝦夷なり。性情溫藹（註3）にして親しむべし。

〔註〕

（1）美しく交じり合っているさま。

（2）暗かったり明かったりしているさま。

(3) 人柄が温かく穏やかなこと。

捉島

国^{クナシ}後の東北に在り。長さ八十里、広さ十里より三里に至る。郡峯競秀し、断続して隠現す。跡狭^{アトサ}・单冠^{ヒトカツツ}（註1）・散粒^{チリツツ}の諸山、尤も聳峭たり。西北岸の地形は支分し、人の臂股の如し。其の間、溪河交^{こも}も流る。湾曲多し。種^{クンネモイ}萌^{モイ}と曰ふ。国後津口と為す。苗穂^{アリモイ}と曰ふ。老門^{オイト}と曰ふ。舊^{フルベツ}戸津^{ベツ}と曰ふ。得^{ルベツ}戸津^{ベツ}と曰ふ。蟻^{アリモイ}萌^{モイ}と曰ふ。椎梁^{シヤナ}と曰ふ。苗香^{ナヨカ}と曰ふ。戸津富^{トツトフ}と曰ふ。様^{シヤマンベ}肖^ベ戸^ベと曰ふ。薬取^{シヤトル}と曰ふ。卷^{マク}夜舞^{ヨマイ}と曰ふ。皆土人ありて住す。其の中の様^{シヤマンベ}肖^ベ戸^ベは、尤も良港と称す。東南に崗巒錯雑^{（註2）}し、峭壁懸崖、往々として人跡を通さず。南に一港あり。单冠^{ヒトカツツ}と曰ふ。港頭に一湖あり。围三里なるべし。

〔註〕

（1）原文は「寇」を「寇」に作るが改めた。以下同じ。

（2）入り交じること。

得粒島（得撫島）

捉^{エトロフ}島の北東五里に在り。長さ四十八里、広さ五六里、或は二三里。東南に一岬あり。櫛^{ウシノ}野津^ノと曰ふ。南は延野津^{ノノ}と曰ふ。

西南は磐余野^{イハシノ}と曰ふ。其の北を湯立^{ユダチ}と曰ふ。其の北を布帆^{ヌノホ}と曰ふ。北の岬を戕執^{カシトリカモイ}岬^シと曰ふ。東北を枝樋^{エトイトモ}輶^モと曰ふ。其の間、峰巒綿亘として蜿蜒^{（註1）}す。往往にして積雪は夏に至るも消えず。南北両岸は地勢下垂し、平坦なること二里なるべし。東南沿岸は率ね沙石に係る。間^ま絶崖峭壁あり。西北は嶄巖嶮峻にして、其の上に石楠^{しやくなげ}・躑躅^{つづじ}多し。其の下は林莽蕪穢し錯雑たり。西岸に一湖あり。遠子谷^{トウコタン}と曰ふ。围二里なるべし。鮭・鱒多し。南岸に一港あり。小舟^{オホネ}と曰ふ。方四五町なるべし。港口は東南に向ふ。西に大巖あり。古墳の如し。舟の港に入るときは古墳の如きを五町外に望む。巖の西に暗礁ありと云ふ。東北に鐘湾あり。口は西北に向ふ。湾の東の岬の外に巖屹立^{（註2）}す。高さ五六丈。湾の西にも亦二巨巖あり。駢立して高さ二丈なるべし。雌雄の象の海を飲むが如し。其の西二町なるべし。暗礁ありて昆布を被る。広さ二町なるべし。舟の行くを碍^{さまた}ぐ。海に黒菜・裙帶菜・鹿角菜・石花菜あり。陸に欽冬多く、茎の

長さ尺余。鶏兒腸あり。莖・葉皆に食に耐ゆ。更に龍葵・葶麻・麦葱・百合・蕎麦葉・貝母（註3）あり。貝母は以て火酒（註4）を製すべし。車前草多し。木は則ち水松あり。甚だ堅韌にして、以て弓を造るべし。赤楊も亦頗る堅緻にして、舟楫諸器を造るべし。其の長さ六尺余。丘岡を被覆す。魚に紅鱒あり。遠洋に大口魚あり。獣は則ち海狸・海驢・海豹、頗る多し。陸に狐・兔あり。虫は蛎子多し。東北附近は小島羅布し（註5）、諸島多し。

〔註〕

- （1）屈曲しているさま。
- （2）高くそびえ立つこと。
- （3）原文は「貝」を「具」に作るが改めた。
- （4）焼酎のこと。
- （5）小さな島が連なりならんでいるさま。

散蠅島（知里保以島）

得粒ワルツの北東四里半に在り。二島昆連す。其の南島は海岸より壁立高峻、北に至りて漸く低し。東西三里半、南北二里なる

べし。全地焦焼す。中央の山嶺は常に烟焰を吐く。僅に点滴一処あるのみ。樹木なし。周囲絶壁にして、鳥、巖窟に巢す。南岸に海狸の児を育つる処あり。又海驢多し。北島には古昔噴火の跡を存す。乾燥磽瘠（註1）し、遠きより之を望めば怪巖礧礧（註2）し、或は臥し或は立つ。南より北に至り、長さ約そ五里、広さ二里なるべし。北方に噴烟三処あり。樹木なし。小港あり。深さ四五尋より十尋余に至る。沿岸に海驢・海豹を産す。南北二島の間は凡そ一里半。潮流激烈なり。西方五里弱に一島あり。幌富ホロトシと曰ふ。東西二里、南北一里半。四周絶壁にして樹木を見ず。硫黄、山を被ひ、海岸、碇泊に便なり。石多く海獣多し。

〔註〕

- （1）土地が瘦せているさま。
- （2）石が多く積み重なっているさま。

篠後島（新知島）

散蠅チルホイの北東十八里に在り。長さ三十里、広さ七里より三里に至る。島の両端及び中央に高山あり。其の間凹凸参差なり（註

し。怒濤に似たり。南界に大岬あり。魯連^{ロレン}と曰ふ。北界を荒生手^{アロシテ}と曰ふ。南西の山腹は常に煙氣を發す。其の他の山麓は樹あるも矮小なり。樺及び赤楊多し。長さ五六尺、枝葉四垂す。五鬚松、其の間に交錯す。山巔の石楠^{しゃくなん}・躑躅^{つづ}多きこと得粒^{ウルツブ}島の如し。海岸は絶壁にして諸鳥・海驢^{アシカ}群聚す。間海狸^{まうらッ}を産す。嘗て土人の海狸^{ウツ}を捕ふることあり。其の岩礁に臥するを候^{うかが}ひ、夜に乗じて網を海菜の間に施し、曉くるに及びて之を捕獲す。皮を剥ぎて樟腦を貼り、積^ひの中に貯^{たくわ}ふと云ふ。海菜・海丹^{ウルツブ}は得粒^{ウルツブ}より富む。陸に狐あり。野鳥多し。北に一港あり。凹字形^{コリト}を成す。凝遠^{コリト}と曰ふ。東西二里なるべし。南北は二里より十町に至る。深さ二百五十尺より二十尺に至る。周囲は巉巖壁立し、屏障の如し。碇泊するに極めて安穩と称す。水陸皆に形勢を操り、北境の管鑰^註と爲す。迤^つなりて南に谷野綿亘たり。耕牧に適す。西岬を日本岬と曰ふ。港口は北に向ふ。広さ二町、深さ一丈余。海底に巨石布列す。昆布多し。短艇^{ふさ}を梗^{ふさ}ぐ。港内に青魚出づと云ふ。港頭に清泉ありて、沸涌して出づ。方四間なるべし。東に一山あり。遠籠^{トウゴム}と曰ふ。東南に遠床^{トウトコシ}後と曰ふ。露人、嘗て住す。漂木を西岸に取り室を造る。其の述

尚ほ存す。

〔註〕

(1) 互いに入り交じるさま。

(2) 鍵のこと。ここでは北方の守りのこと。

毛槌島^{ゲトイ} (計吐夷島^{ケトイ})

篠^{シノ}後の北東七里に在り。南より北に至るまで約そ七里。広

さ四五里。高峯、西より東し、漸く低し。草・篠多し。樺・檜は困二三尺なるべし。百合多し。狐多し。中央の山脈は高大にして、樹木矮小なり。水は雪の消ゆるに随ひて涸る。海岸は巖石屏圍し、湾曲多し。絶壁は高さ数丈に及ぶ。海驢^{アシカ}・諸鳥、群聚す。間海狸^{まうらッ}・海豹^{アザラシ}あり。海底は石多く且つ深し。潮汐は箭激^註たり。南岸の一諸は稍^や宜しく碇泊すべし。西北に一河あり。鰭足^{ベレタルベツ}戸津と曰ふ。河中に魚なし。

〔註〕

(1) ここでは流れが速く激しいさま。

大人後島 (宇志知島)

毛槌ケトの北東五里強に在り。南北に二島あり。間隔四五町。潮の落ちる毎ごとに一路を現はす。徒渉すべし。其の傍の深さは七八尋より十二尋に至る。海底に沙多し。以て碇繫すべし。其の南島は南西より北東に二里強。広さ一里半。南岸は高峯の突出すること數十丈。山麓に水あるも甚だ少し。野草繁滋するも、樹木なし。東南に一湖あり。円形を成し、囲十五町なるべし。口の海に注ぐ者二あり。四周山嶽なり。港中に二小島あり。現に噴火の痕を存す。港の東に火槳の逆流する声あり。琉黄の氣を含む。港の口は暗礁ありて危険なり。舟を行くべからず。島の東西兩岸は間宜しく碇繫すべし。露艦の嘗て泊むる所なり。岸边に鴨の多きこと諸島に冠たり。往々にして巖間に巢す。人ありて巖上に立ち小網を撒はなてば、一挙に数十羽を獲べし。地を歩けば孔穴あるを望む。其の巢を構かえて児を育つるを知る。手を伸して之を捕するに、一母毎ごとに三子あり。毛を剥はきて服つくを爲る。四十羽毎ごとに一裘を製すべし。肉を乾して収貯し、以て食料に供す。又海驢アシカ多し。岸上に群聚す。北島は東西二里強なるべし。広さ一里なるあたはず。高邱に樹林なし。鴈多く卵を産む。

北方附近に一小島あり。其の西の一处は小舟を泊す。頗る安穩なり。二島の沿海は海狸ウツコを出すこと最も多し。其の磯石の棲息に便なるを以てなり。

磨戸庭島

大人後の北東二里余に在り。小嶼羅列し、其の間に海狗オットセイ・海狸多し。海驢アシカを出づること尤も夥おびただし。

楽相島 (羅処和島)

磨戸庭スレトニハの北東二里半に在り。西南より東北に約およそ六里。広さ之に称かなふ。地に樹草多し。又赤黒の二狐あり。尤も黒狐多し。北岸に一峯突起す。南に至りて漸く低し。事コト枝葉エダシベと曰ふ。東岸に噴火二処あり。峰巒積雪し、夏を経るも消えず。山麓の樹木は矮小なり。中央に茶茶嶽あり。常に烟焰を吐く。琉黄多し。南に峯ホシノボリ登山あり。山下は樹木茂生す。樺は囲合抱に至る。其の西の海中に両大巖あり。折オレヒヂ肱間アヘと曰ふ。南北の兩岸は間海驢アシカ多し。東岸の絶壁は鳥ありて群聚す。河を血荒洲シヤラスと曰ふ。広さ一尋なるべし。江原子落エバコチと曰ふ。広さ二尋に至る。並びに

嘉魚^{イハナ}あり。其の北を音血^{オトチフユ}冬と曰ふ。一処に蓴麻多し。其の皮を剥きて以て糸を製し網を修すべし。

股芋島^{マタヲ}（松輪島^{マツワ}）

楽相^{ヲサヲ}の北東七里半に在り。南より北に長さ七里。広さ五六里。雲外に高く聳ゆ。富士山を髣髴とす。真崎^{マサキ}と曰ふ。絶頂^{マサキ}（註一）は四時に煙を噴す。硫黄、半腹に露出す。南に至つて漸く低し。島に樹木多けれども矮小なり。率ね檜樹多し。野草繁茂す。赤狐及び海驢^{アシカ}・海狸^{ラッコ}・海豹^{アザラシ}あり。海豹は甚だしくは多からず。一小河あり。經洲^{ヘスホ}帆と曰ふ。清潔にして飲むべし。河傍の平原は遶^{つら}なりて東に岸を距つること四五町。一島あり。圍二里半なるべし。丘谷円亘なり。鴈及び花魁鳥多く、群聚して巢を構う。両島^{あい}相距たるの間は深さ十二尋より十八尋に至る。海底に石多し。碇繫するに安穩ならざるはなし。北岸を昆布^{コンブ}萌^{モイ}と曰ふ。其の洋中に数小石嶼あり。昆布多し。冬の間は海狸^{ラッコ}ありて来り住む。

〔註〕

（一）原文は「頂」を「頃」に作るが改めた。

雷国島^{ライコク}（雷公計島^{ライコウケ}）

股芋^{マタヲ}の北西二里半に在り。東西四里、南北三里。闔島^{カウ}（註一）皆山なり。山谷險惡にして、絶頂は煙を噴して息^{やす}まず。中に大洞あり。地質瘠薄にして樹木なし。唯だ草芽を生ずるのみ。鴈及び海狗^{オットセイ}多し。西岸に海狸^{ラッコ}・海驢^{アシカ}あり。海驢は千島第一と称す。海底淵深にして巨巖森列す。潮流猛激なり。

〔註〕

（一）島じゅう、の意。

藻後島^{モシリ}（牟知列岩^{ムシル}）

一に灰富^{ハイトミ}足と曰ふ。雷国^{ライコク}の北東十里強に在り。四島崛起す。一を子谷^{コガシ}藻後^{モシリ}と曰ひ、一を散藻^{チルモシリ}後と曰ひ、一を戸音^{トモシリ}藻後と曰ふ。一は其の名を忘る。丘陵低平にして樹木なし。唯だ草ありて芋芋^{コガシ}（註一）たるのみ。子谷島は嘗て土人ありて住すと云ふ。「散^{チル}」とは土語に鴨なり。「戸音^ト」とは海驢^{アシカ}なり。南界に海驢^{アシカ}・海狗^{オットセイ}多し。北には海豹^{アザラシ}あり。海底は巖石ありて、海草繁衍す。

〔註〕

(一) 草木がさかんにしげるさま。

勢至子谷島 (捨子古丹島)

藻後の北東五里に在り。南より北に約そ十四里。広さ七里より四里に至る。島の両涯は山嶽參差牙錯す。山に樹木多けれども矮小なり。赤狐及び海驢・海狸あり。海岸は平土にして温泉多し。山の半腹にも亦あり。小河多し。飲料に適す。西岸に火を噴する二山あり。南を子留垂と曰ひ、北を枝繰菱と曰ふ。五鬚松あるも甚だ矮小なり。二山の間は丘陵にして高さ十余丈。樹木穢雑にして、草・篠地に鋪く。迤なりて北に大巖森羅す。而して中央に灣港あり。織沙 (註1) 平布し、宜しく小舟を泊すべし。海岸の数処は熱泉沸騰す。其の熱は八十度より一百五十度 (註2) に至る。北西に枝枯間・散生子谷 (註3) と相向ふ。以て風浪を避くべし。海鳥の群飛するあり。魚・蝦の多きこと知るべきなり。嘗て土人の盧を構ふるものあり。地震に遭ひ、一椽も遺さず。枝繰菱の東に嘸野津あり。海狸多し。西岸を肉戸負と曰ひ、山西を萌洲門と曰ひ、西南を折穂萌と曰ふ。折穂萌も亦海狸多し。闔島海底に石多し。沿

岸の間には沙地あり。

〔註〕

(一) 細かな砂のこと。

(二) 華氏で表記してある。摂氏では約26℃〜66℃。

(三) 原文は「散生子谷」を「散子谷」に作るが改めた。

散生子谷島 (知林古丹島)

勢至子谷の北西 (註1) 七里半に在り。南北約そ三里、東西一里半なるべし。断崖峭立すること削るが如し。西に煙を噴する二処あり。境を環りて皆巖石にして絶えて樹木少なし。水泉なし。鴨及び海驢多し。間海狸・海豹あり。海底は深くして石多し。

〔註〕

(一) 原文は「北西」を「正西」に作るが改めた。

枝枯間島 (越渴磨島)

勢至子谷の北西二里に在り。長広各四里。峯巒重複し空に聳ゆ。樹木あるも甚だしくは多からず。水性透明なり。土人の

居住の跡あり。四面断崖にして諸鳥・海驢多し。海底は勢至子谷の如し。

春生子谷島（春牟古丹島）

勢至子谷の北東八里に在り。東西約そ十里、南北六里なるべし。峯勢連亘として高く聳ゆ。嘗ては噴火を経、往往として疎林相望む。香扁留・經通門の両湖あり。並びに魚を産ぜず。經通門湖の旁は平原にして草多く暢茂す。地に百合多し。其の花の赤き者、白き者、黒き者、尽く具はる。「春」とは土語の百合なり。又樹木多し。海に海豹・大口魚多し。

大根子谷島（温祢古丹島）

春生子谷の北東四里半に在り。南北二十四里。広さ十五里より六里に至る。南東に大岬あり。蟻寝摺と曰ふ。地に百合多し。諸色の狐及び鷹・鴨多し。横峯（註）疊嶂し、憔悴して屹立す。中央に脊起せる高峻は、半腹にして上る。禿げて草木なし。麓に林木ありて陰翳あり。沿岸は平夷にして、野草・蘆芋あり。迤なりて南に大山あり。梅後と曰ふ。峭壁、天に參

す。嶺上は常に白煙を噴す。海岸に海驢・海豹多し。間海狸あり。其の西南は地形弓の曲がるが如し。一大湾を為す。西岸一帯は赤土・丹石の混合して成る。岡陵断続して其の北に一山あり。墓後と曰ふ。山西の一河を千家嘗と曰ふ。広さ七八間、深さ五六尺。鮎及び鱒多し。其の北を網後目垂と曰ふ。此の島の北界に六小湾あり。皆甚だ浅し。千家嘗は第五湾内にあり。河を浜ること二十余町、広さ四間なるべし。西崖の絶壁は削るが如し。時あらば、風、壁上より突き至る。船を掀げて頗る危険なり。凡そ船の千島高山の下に泊する者は、動もすれば此の患ありと云ふ。第六湾は岸を距つること十町に深さ十尋に至る。島の沿岸は海草多きこと篠後郡の如し。海底沙多し。碇泊の地は七尋より十二尋に至る。東北に巖ありて海驢多し。

〔註〕

（一）いくつも集まり重なっている山や峰。

青摺島

大根子谷の西九里に在り。小島列峙し、錐を立つるが如し。

遠きより之を望めば、布帆して奔り馳する者の如し。呼びて帆懸島と曰ふ。土人は蠅子ハイノコと曰ふ。諸島・海驢アシカ、群を成す。間ま海狸ラッコあり。

マカンレシ
罷 大人島マカンレシ（磨勘留島）

青摺アズリの北東二里半に在り。東西約そ七里余、南北は五里なるべし。重巒（註一）峨峨として樹木多し。東方は稍平地あり。林莽間雑たり。水は雪の消ゆると与に涸る。海狸ラッコ・海豹アザラシ・諸島あり。西方に高大巖あり。灰後木ハイノツキと曰ふ。海驢アシカ多し。

〔註〕

（一）原文は「巒」を「巒」に作るが改めた。いくえにも重なっている山々のこと。

ホロモシリ
幌藻後島（幌筵島）

大根子谷オオネコガンの北東十里強に在り。西南より北東に長さ約およ六十里、広さ十八里より二十里に至る。起伏凸凹して波濤の如し。南東に一岬あり。黒部片クロベセリと曰ふ。南西を縫前ヌエマエと曰ひ、西南を香張カバルと曰ひ、西北を編撫アムナデと曰ひ、北西を椎副シシソクと曰ひ、北東

を飯取枝イトリエと曰ひ、東南を椎瀬塚シセツカと曰ひ、其の南を種櫛タネクシと曰ふ。西岸は火峯を並列す。南を尻谷シリヤシリ後と曰ひ、北を血止関チヤブンシキと曰ふ。高峻三千尺。富士山の如くして最も尖聳す。冰雪凝積し、終年消えず。往往にして崩墜して骨を露はす。其の色は暗黒たり。血止関チヤブンシキは最も高峻なり。嘗て噴火を経るも山下は樹木蒼然たり。山上には一木も見えず。二山の間は高原坦潤なり。東に一山あり。網後卷アシリマキと曰ふ。地に樹木多し。櫓は囲二三尺。五鬚松は囲尺余なるべし。積雪之を圧し、地上に匍匐はふくす。松枝重層し、熊ありて巢を其の間に構ふ。更に楊柳諸木多く、斬伐して以て炭薪と為す。勝あけて用うべからざるなり。西南に二湖あり。南を藥程シスホトと曰ふ。囲二十町なるべし。西を別登部ベツトウと曰ふ。稍大なり。其の間は相去ること一里なるべし。南湖の口は海に注ぐ。深さ腰に至る。鮭・鱒群至す。土人、木を水中に列し、簀すを將もつて其の間を編み、魚をして一方より湖中に入らしめ、網を投じて之を捕ふ。重くして揚ぐべからず。魚死して水中に堆積す。西湖は其の口狭くして浅し。網獲を要せず。棒を持して撲殺す。須臾にして收穫して算なし。西湖の左右は原隰ま円く亘る。野草多く樹木なし。土人嘗て犢牛六十を露人に

得て放牧す。其の香張泊は頗る寛広なりと称す。其の北に四河あり。萌織戸津と曰ひ、血合香と曰ひ、小岸女津と曰ひ、散洲と曰ふ。並びに鮭・鱒多し。東北に一河あり。遠折木と曰ふ。紅鱒多し。河旁の平原には楊柳多し。其の北に弟前湾あり。ト栖の霜稻湾と相向ふ。深さ四尋より十二尋に至る。海底に沙及び粘土多し。港の南に大巖石五六ありて屹立す。巖下は潮流箭駛たり。北岸は高峯列峙し、其の下は原野広坦なり。群峯皆硫黄の氣を含む。紛紛として鼻を衝く。二河あり。一は北に在り。広さ一間、深さ一尺。清冽にして飲むべし。一は南に在り。広さ五間、深さ四五尺。源を硫黄山に発す。海水皆硫黄色に現はる。大巖より東に二里、一礁あり。扱巢と曰ふ。船の南より往く者は、必ず此の際を過る。其の深さは一百二十五尺より七十五尺に至る。ト栖島の南岸は礁多く且つ浅し。故に海を航する者は、必ず幌藻後に沿ひて弟前湾に入るなり。關島沿海の港汊は深穩なり。砂石多し。間断崖ありて峻峭たり。潮を候ふに往来あり。地に熊・狐及び鷺多し。間狼あり。航行するに常に熊・狐の海岸を遊歩するを望む。海岸には毎年必ず漂至の鯨四五頭あり。長者は十五六丈、短き者は七八丈。

熊聚まり食ひ且つ臥し、其の側を離れず、以て鯨を尽くすに至ると云ふ。間白熊あり。未だ嘗て人を害せず。狐は則ち赤色の者多く居る。間白黒二種のものあり。海豹多し。間海驢あり。迤なりて南に稍海狸あり。魚は鮭・鱒を推す。次いで紅鱒たり。又一種の魚あり。鮭に似て河を浜る。長さ五六尺、囲合抱なるべし。海中に青魚あり。未だ捕獲せしを知らず。其の他、大口魚・梭魚の類、甚だ多し。又昆布多し。其の余の海草は篠後郡の如し。陸には車前草多し。東方に鳥島あり。岸を距つること約そ六里。敷島屹立し鳥類巢す。海豹多し。海狸あり。海浜鹹淤（註一）なり。

〔註〕

（一）塩氣のある泥地の意か。

シリン島（志林規島）
後向島

幌藻後の西四里に在り。東西三里、南北一里半。雷国島に比して稍大なり。懸崖千尋、乱石林立す。地に樹木なし。水泉なし。一山あり。巖石峨峨として、南に噴烟する一処あり。間海豹・海狸あり。鳥類・海驢、群を成す。海底深く石多

し。

荒糸島アライト（阿頼度島アライド）

幌藻ホロモシリ後の西北九里弱に在り。南西より北東に広さ六里。蒼巖森峭として、雲際に虎踞（註1）す。迤ツなりて南に丘陵漸く低し。海中に斗出す。象鼻の江に飲むが如し。樹木矮小なり。檜・白楊・五葉松多し。獸は赤狐・海豹アザラシ多し。西岸に海驢アシカ多し。

〔註〕

（1）虎がうずくまつてゐる形に見えること。

ト栖島シムシユ（占守島シムシユ）

幌藻ホロモシリ後（註1）の北東半里強に在り。南東より北西に約およそ十五里。広さ十一里。健歩なれば三日にして乃ち一周すべし。一望するに丘岡林野の平坦なること満月の如し。東南に大岬あり。唐津根カラツネと曰ふ。西岬を鮎子津ツヤコツと曰ひ、北岬を老馬塚ラフバツカと曰ふ。其の土は黒青なり。草木の腐蝕するに成る。耕牧に適す。特に野鼠と勁風とを恐るのみ。野鼠尤も多し。往往として松

実を含みて来る。堆積して冬を禦す。土人採し得て、魚脂に和して之を食ふ。甚だ美うまし。更に熊・狐あり。冬間の積雪は二尺余に至る。地面の冰凍すること一尺なるべし。五月に至りて雪消け、復た氷凍の患なし。夏は則ち諸草繁滋す。草実の餌食すべき者多し。山に入りて之を採るに、須臾にして一担を獲べし。又延胡索・虎杖・珊瑚菜・野豌豆・蒲公英多し。一種の蒜あり。幾登キトと曰ふ。味は臭くして美し。又恵登良夫エトヲフあり。根を食ふ。豆の如くして稍長やし。馬鈴薯・赤蘿・菖蕪・菁葱等を耕作す。繁碩ハナシロ（註2）せざるはなし。河湖縦横にして魚多し。其の水は清冷にして飲むべし。夏候は温暖にして、諸川に鮭・鱒多し。又紅鱒あり。湾岸は鹹淤なり。比目魚・大口魚等多し。昆布・黒菜ヤシノシは稍篠や後郡に譲る。東西両処に間海狸マウツコを産す。四周海豹アザラシ多し。間海驢マアシカあり。東北は罕カン祭架シヤツカを距つること八里に過ぎず。嘗て土人ありて拂曉に舟を發し、午に至りて乃ち達す。舟は漂木を以て之を造る。釘を要せず。舳艫ジクワ（註3）高く聳え、長さ三四間なるべし。北方に一湖あり。長さ二十町、広さ一町なるべし。湖辺を子谷コタニ煮と曰ふ。湖口は海に注ぐ。広さ十三間なるべし。別当部ベツタウブと曰ふ。其の東南に一河あり。三三サンサン中チツと

曰ふ。島の南端は稍暗礁ありて舟を行き難し。昆布あるも多少を知る能はず。西南は幌藻後と相向ふ。河流あり。舳舻と曰ふ。其の北を血間縫と曰ふ。其の北を後香戸津と曰ふ。其の北を萌織経と曰ふ。一に霜稻と曰ふ。西は幌藻後の弟前湾に對す。左右に暗礁あるも中央は弓曲す。岸を距つること九町。深さ三十五尺より四十尺に至る。海底は皆砂礫。碇繫に便なり。嘗て露商一家・教堂（註4）一字ありと云ふ。潮は則ち北行す。一時間に行くこと三里に及ぶ。此の間を北海の門戸と爲す。宜しく港を開きて埔（註5）を建すべし。

〔註〕

（1）原文は「幌藻後」を「幌藻」に作るが改めた。

（2）さかに繫っているさま。

（3）船尾と船首。

（4）教会。

（5）「埔」では意味が通じない。誤植と思われるが元字は不明。

千島の地形は狭くして長し。東西両海の間を隔つ。氷海に非ざるなり。唯だ海岸湾曲し、極寒に当りて凍合するのみ。正月

より四月に至るまで氷塊の流れ至ることあり。舟に触れて碎くを恐る。盛夏の氣候は嘗て寒暑鍼（註1）を以て之を驗するに、得粒島は六十四度より四十三度（註2）に至り、ト栖は五十五度より三十度（註3）に至る。百卉（註4）俱に茁む。欣欣として榮に向ふ。春夏は則ち東南に陰霧多く、秋冬は則ち西北に陰霧多し。時ありて迷漫し、咫尺（註5）も弁ぜず。其の西岸は沙を揚げ崗を成すの処多し。風勁きが故なり。沿岸一帯は大木漂ひ至りて堆積し丘を成す。落葉松多し。間白楊等あり。板を鋸り薪を焼きて家屋船舶を作る。意の如くならざるはなし。固に無尽蔵たり。故に西岸は往往にして嘗て土人の住するあり。守栖・幌藻後已南の諸島は皆魚類多し。比目魚・杜父魚の如きは到る処に之あり。而れども鮭・鱒の二者は寥寥として幾くもなし。二島の多きに如かざるなり。大人後・雷国の間は海底尤も高嶽多し。動もすれば波流の洶湧（註6）して天を掀ぐるを患ふ。諸島の沿岸には海狗・海驢・海豹多し。陸に熊なくして狐と鷹・鷗多し。土人は嘗て網を施して海狸を捕ふ。夏に至れば則ち去りて蹤跡を見ざるなり。海狗と海狸とは反す。唯だ夏日のみ群れ至るのみ。草類の食ふべき者は、

吳^ウ伯^ベ胡^ホと曰^{イハ}ひ、袁^オ索^ソ突^トと曰^{イハ}ひ、吉^キ那^ナ須^ス天^テと曰^{イハ}ひ、拉^ラ吉^キ牟^ムと曰^{イハ}ひ、摸^モ理^リ天^テと曰^{イハ}ふ。摸^モ理^リ天^テは根^ネ・葉^{エフ}を併^ヒせ食^クふ。吳^ウ伯^ベ胡^ホは海^{ウミ}岸^カには常^{トキ}に之^レあり。土^{ツチ}人^{ニン}の衣^エ服^{フク}は嘗^カて海^{ウミ}狸^リの子^コを獲^トて、其^レの皮^{クニ}を剥^ヒぎて衣^エと為^スす。或^ハは狐^{キツネ}皮^ヒ・犬^{イヌ}皮^ヒを服^クす。或^ハは鷗^ウ・鷺^{ササギ}の毛^{モウ}羽^ウを用^ユう。犬^{イヌ}は則^{スグ}ち毎^マ家^カ土^{ツチ}室^{シツ}を作^{ツク}りて之^レを養^ヤふ。以^テて雪^{ユキ}車^{クルマ}を牽^ヒかしむ。

〔註〕

(1) 寒暖計のこと。

(2) 摂氏では約18℃〜6℃。

(3) 摂氏では約13℃〜1℃。

(4) 多くの草木。

(5) 非常に近い距離。

(6) 波がわきあがる音。

【村山徳淳跋文】

友人草庵岡本君は、夙^{ソク}に経^{キョウ}世^セの志^シを抱^エき、北^{ホク}海^{カイ}道^{ダウ}の事^{コト}に於^オて尤^{モト}も心^{シン}を尽^{ツク}す。維^イ新^{シン}の初^{ハジメ}め、其^レの地^チに奉^{ホウ}職^{シツ}す。今^{イマ}日^{ニチ}の治^チを致^チすは、君^{キミ}の力^{リキ}あるに与^アかる。既^{スデ}にして官^{カン}を罷^ハめ、専^{セン}ら文学^{ガク}に従^{ツグ}事^{コト}

す。然^{シカ}れども胸^{ムネ}中^{チュウ}耿^{コウ}耿^{コウ}（註1）として未^ミだ灰^{ハイ}とならざるなり。著^{シヤク}す所^{ショ}の『千^{セン}島^{シマ}見^ミ聞^{ブン}録^{ロク}』は、皆^{みな}君^{キミ}の足^{ソク}跡^{セキ}の及^{およ}ぶ所^{ショ}にして、目^メ撃^{キツ}して親^{ミヅカ}ら視^ミる者^{モノ}を記^シす。昔^{ムカシ}人^{ニン}の地^チ図^ズに拠^よりて蝦^{エマ}夷^イ志^シを撰^{セン}するとは、大^{オホ}いに逕^{テイ}庭^{テイ}（註2）あり。文^{モン}字^ジも亦^{モト}雅^ヤ健^{ケン}、簡^{カン}にして尽^{ツク}す。『水^{スイ}経^{キョウ}注^{シュ}（註3）』の趣^{ソウ}あり。近^{キン}日^{ニチ}、君^{キミ}将^{マカ}に復^{フタヘ}赴^{シュ}かんとす。後^{ノチ}来^キ為^スす所^{ショ}の事^{コト}業^{ゲツ}は、必^{カナラ}ず観^{カン}るべき者^{モノ}あらん。余^{オレ}企^キてて之^レを望^{ノゾ}む。卷^{マク}後^ゴに附^{ツケ}する所^{ショ}の詩^シ数^{スウ}首^フは、英^{エイ}氣^キの勃^{ハツ}勃^{ハツ}たる（註4）こと行^{ユク}間^{カン}に溢^{あふ}れ、其^レの志^シ氣^キの壮^{ソウ}なること驚^{オドロ}くべきなり。

明治五年五月四日

辱^{ハジメ}友^{トモ}拙^{セツ}軒^{ケン} 村^{ムラ}山^{ヤマ}徳^{トク}淳^{ジュン}（註5） 拝^{ハイ}識^シ

〔註〕

(1) 光^{ヒカリ}りか^がやくさ^{さま}ま。

(2) 大^{オホ}きな隔^{ヘキ}たり。

(3) 中^{チュウ}国^{コク}の地^チ理^リ書^{ショ}。北^{ホク}魏^{エイ}の鄒^{ソウ}道^{ダウ}元^{ゲン}が『水^{スイ}経^{キョウ}』に注^{シュ}を施^セしたも^ノ。

(4) さか^さんなさ^{さま}ま。

(5) 一^{イチ}八^{ハチ}三^{サン}二^ニ九^ク三^{サン}。名^ナは徳^{トク}淳^{ジュン}、字^ジは大^{ダイ}樸^{ハク}、号^{ゴウ}は拙^{セツ}軒^{ケン}。江^エ戸^コの人^{ニン}。漢^{カン}学^{ガク}者^{シャ}。

医^イ家^カ塩^{シホ}田^{デン}順^{ジュン}庵^{アン}の次^ジ子^シで、医^イを以^モて幕^{マク}府^フに仕^シえた。維^イ新^{シン}後^ゴは大^{ダイ}藏^{ゾウ}・内^{ナイ}務^ム各^{ガク}省^{ショウ}の史^シを編^{ヘン}纂^{サン}した。